

## 松山大学経済学部2020(令和2)年度推薦入試合格者 課題「書評」

氏名: 須崎稀良立

受験番号: 1600135

対象とした本の番号: 2

タイトル: あひ少しもく少し

※ かならず万年筆かボールペンで「清書」すること(鉛筆・シャーペンは不可)。なお句読点(、。)や「」が行頭にくるときは、行末の字と一緒に書くかマスの右に書くこと。だれにでも癖字はありますが、丁寧に書くことを心がけてください。さらには最後に4枚をホチキスで綴じてください。

田舎町の小さな中学校の駅伝部、走る区間は1区から6区まであるにも関わらず駅伝部員は、陸上部部長の「舛井」、内気な「設楽」舛井に憧がれる後輩「俊介」の3人だけ。残る3人は陸上部部長の舛井が声をかけ、続け、不良の「大田」、変わり者の「渡部」明らくな調子者の「ジロー」が助、人として加わった寄せ集めの駅伝チームだ、た。そんな寄せ集めのメンバーでも顧問の「満田先生」がありれば強くしてくれ、県大会にも出場で予ると信じていた。しかし教師には移動があり、八年間市野中学にていた満田先生も異動ありとてになり、変わりに顧問になり、たのび、去年まで美術部の顧問であり、陸上の「リ」の字も知り合いとうじ頼りない「上原先生」、なんとも波乱の幕開けであった。

内気な設楽は、中学校に入学し仮入部で迷、下部浩は美術部とパソコン部だ、た。だが小学校の時に、ある理由で駅伝をやせられ区間1位という見事な走りをしていたのを見ていた舛井が駅伝部に入るよう説得した。それがからタイムで悩む日々が続くが顧問上原先

生から「アーレ・ツィマーがなりから走くにしゃ  
アーレンダード」とアドバイスをうけ、どんどん  
成長していく設楽。ひとり区間ごとに六人の  
走者の面白が重なり、ていく物語。読んでいく  
ごとに、や々気がぶりにうに見え大田は、  
実に戦わずとすく意地が強い心をもつたんだ  
、たり、ワールドズバスバ言う渡部は、実は  
バ優しく他者の心の動きに敏感な人だ、た。  
そして、上原先生は何も考えていないと  
実に、ものすごく觀察力に優れた指導者だ、  
たりと読めば読むほど、どの人の内面を知る  
ことができた。最初は、部員たちが言、てり  
かてと子供だと感じていたが、一人の  
気持ちを知っていくにつれて子供と大人の世  
界を葛藤しながら手さぐりで、それでも上手  
に部活をまわしていくと、その純粋な心を感じ  
られてとができた。「大人」や「子ども」と  
い、た容易な言葉でかれらをくくろてとてで  
ちが、一人一人で今まで思いや事情を宿す  
「人間」のだというてとが強く伝わ、てく  
る。

私たちに、だれもが一人のた。けれどそ  
の厳然とした事実と同じく、私たちに一  
人ではなし。一人で走りきるてとのでモソシ  
トウノ長い道のりであ、とも、駅伝では首で  
手のさをつねりながら走、ていく。私たちに

決して1人でいてはいけない。そう感じさせてくれ中学生時代や、高校での部活動を思い出させてくれる青春小説である。

1000字

この物語の面白さは、区間でとて大人の走者の独白が重なり1人1人の内面を知つてしまい、子供から大人へと成長していく中の心境の変化である。最初は皆が嫌々やっていた駅伝練習も友達とのことででざを乗り越えながら自分という人間がどうゆうものかというてとを分かれながら、だんだん楽しくなり因縁して練習するてとができると考える。また、同じ場面でも人が変わればつれて考え方も変わつてしまい、視点が違うと違う捉え方ができるので新鮮である。

私がこの本で一番印象的のはのは、最後の6区を部長の柳井が走る場面だ。「中学校最後の夏休み。万国旗も壁も行かず参考書を開かず走つてばかりいた。大会でうれしか不思議だ。走れなくなり、てく自分に、どんどん自信がなくなり、た。だけど、X=バーが増えるたび、胸が弾んで。汗は止まらず度、わくわくした。」という文章だ。柳井は駅伝部の部長であり、県大会出場を目指しているため、とても荷が重かたと思う。だが明らか前向千鶴とモウハツを主とめており、大人顔負けの柳井の心の中の辛さや葛藤が描

かれている。中学や高校で運動部だった人や文化部でも激しい活動をして、大人びら親切や可い内容になるだろう。

そして、全体的に見ると、とても面白く、同じ場面でも1人1人の視点から見ると全然違う景色に見え、1人ずつの中面を深く知っていくと新しさが観点に気づくため、どんどん読み進められてとがでた。物語の世界に引き込まれていく中で、中学生ながら、たくさん責任を抱え、たくさんのことを考え、友達とぶつかり合ってからも本当の自分を見つけだしていくんだだと感じることがでた。そして、自分もトイレ時があり、たとえ振り返るてとがでた以上うな気もする。

中には、一番が近いのに体調問題が起るなどとのハラニンケもあるが、仲間同士で声をかけあい、仲間の大切さを感じることもできる。そして、家族や周囲で応援してくれていろ人もいることで1人で孤独を感じにくう種目でも、1人で孤独を感じにくうじがこれまで先が、たとえても人は、必ず1人ではいつもと違うことが強く表現されてる。これから若者の人はいつも考える作者の想いが、希望を、そして、明るい未来を信じて生きていくことの大切さが文の1行1行から伝わってくる、とても感動的な作品である。